

無標の過去時制記号素と過去の習慣

— 過去における習慣的な事態を表現する半過去記号素 —

川 島 浩 一 郎*

1. はじめに

半過去記号素は、無標の過去時制記号素である。つまり半過去記号素は、過去時制記号素（半過去記号素および単純過去記号素）の機能的な共通部分のみを備えた表意単位である。半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態を、過去時間に位置づけることにほかならない。たとえば現在形の動詞を用いた（1）の *le patron est ...* と半過去の動詞形を用いた（2）の *le patron était ...* の間にある表意機能的な相違は、事態の時間的な位置づけが現在時間にあるのか過去時間にあるのかの違いに還元される。半過去記号素は、事態を過去時間へ位置づけることに特化した表意単位である。

(1) *Le patron est un ami.* (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.20)

(2) *Le patron était un ami, [...].* (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.214)

(3) *Le dimanche, il s'éternisait au café, [...].* (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.183)

* 福岡大学人文学部教授

(4) Le matin, il *restait* au lit jusqu'à onze heures et demie. (Amélie Nothomb, *Robert des noms propres*, Collection Le Livre de Poche, 2002, p.11)

(5) Elle *mentait* souvent, quand elle était petite, [...]. (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.76)

過去時間における習慣的な事態の表現において、半過去記号素の実現形が現れることがある。たとえば(3)の *le dimanche, il s'éternisait ...* や(4)の *le matin, il restait ...* は、過去時間における習慣的な事態であると言ってよい。(5)の *elle mentait souvent, ...* も同様である。これらの発話には、半過去記号素の実現形が含まれる。

過去時間に成立していた習慣的な事態が現在時間においても維持されているのか維持されていないのかという弁別を、半過去記号素は積極的には表現しない。半過去記号素は、無標の過去時制記号素だからである。たとえば(3)の *le dimanche, il s'éternisait ...* や(4)の *le matin, il restait ...* が現在時間においても成立している事態であるのかそうでないのかは、半過去記号素の使用にとっては、非本質的な単なる解釈の問題にすぎない。無標の過去時制記号素である半過去記号素は、完了した事態と未完了の事態の弁別を含意しないのである。また過去時制記号素である半過去記号素は、現在時間に位置づけられた事態に直接的に言及するような表意機能を備えていない。

2. 半過去記号素, 単純過去記号素, 複合過去記号素の基本的な表意機能

2.1 表意単位の実現形としての必要条件

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、その切片を他の切片(ゼロ切片でもよい)と入れ換えることによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることが必要である。知的意味という用語は、大略、言語共同体

において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。

条件（A）発話の一部分において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。

条件（B）この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。

つまり発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、少なくとも上の条件（A）および条件（B）の両方がみたされることが必要である。たとえば（6）および（7）では、*aimé* と *sommeil* を入れ換えることができる。つまり *aimé* と *sommeil* が条件（A）をみたす。また *aimé* と *sommeil* の入れ換えによって、（6）や（7）の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。つまり *aimé* と *sommeil* が条件（B）をみたす。したがって *aimé* と *sommeil* はそれぞれ、少なくとも *j'ai ...* という文脈において、表意単位の実現形であるための必要条件をみたしていると考えてよい。

（6）*J'ai aimé.* (Nicole de Buron, *C'est fou ce qu'on voit de choses dans la vie !*, Collection Pocket, 2006, p.202)

（7）*J'ai sommeil.* (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.409)

（8）*J'ai trop sommeil.* (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.32)

入れ換えの可能性が検証の対象となる切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を指す。たとえば（7）と（8）にみられるように、*j'ai trop sommeil* の *trop* はゼロ切片と入れ換えることができる。この入れ換えは（7）と（8）に、知的意味にもとづいた弁別を生じさせる。よって *j'ai trop sommeil* における *trop* は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす。

最小の表意単位は、記号素と呼ばれる。記号素は、それ以上小さな表意単位

に分割することができない表意単位である¹。つまり記号素の実現形の内部において条件 (A) と条件 (B) をみたす切片は、その記号素の実現形全体だけである。たとえば (8) の *sommeil* の内部にあって条件 (A) と条件 (B) をみたす切片は、この *sommeil* の全体しかない。よって (8) の *sommeil* は記号素 (最小の表意単位) の実現形であるための必要条件をみたすと言ってよい。

2.2 表意単位の実現形としての必要条件の必然性

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、その切片が、少なくとも次の条件 (A) および条件 (B) をみたすことが必要である。条件 (A) 発話の一部分において、その切片を他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。条件 (B) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。この2条件は、発話の切片が表意単位の実現形であるための必要条件である (2.1 を参照)。

条件 (A) および条件 (B) をみたす発話の切片が、表意単位の実現形であるとはかぎらない。たとえば [twa] における [t] と [dwa] における [d] は、条件 (A) と条件 (B) をみたす。しかし、これらの [t] や [d] を表意単位の実現形と言うことはできない。これらの [t] や [d] は、表意単位の実現形ではなく、弁別単位の実現形である²。

(9) *J'ai ri.* (Nicole de Buron, *C'est fou ce qu'on voit de choses dans la vie !*, Collection Pocket, 2006, p.202)

(10) *À cinq mètres de haut, Brolin dominait toute la clairière Eagle Creek 7.* (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004,

¹ 非最小の表意単位は、連辞と呼ばれる。連辞は、複数の記号素の複合体である。なお最小の表意単位は、形態素とも呼ばれる。

² 表意単位を弁別単位から区別するためには、おそらく「当該の切片を除いた発話の他の部分が表意単位 (記号素あるいは連辞) の実現形である」という条件が必要である。

p.125)

発話の切片が条件（A）をみたさないとき，その切片を表意単位の実現形であると言うことはできない．条件（A）に反して，かりに（9）の ai および ri を（ゼロ切片も含めて）他の切片と入れ換えることができないと仮定しよう．この仮定によれば，これらの ai と ri は一体化して，分離することが不可能である．つまり（9）における ai と ri はいずれも，（10）の *clairière* における ai や ri と同様，記号素（最小の表意単位）の実現形の一部分にすぎないことになる．

発話の切片が条件（B）をみたさないとき，その切片を表意単位の実現形であると言うことはできない．条件（B）に反し，（9）の ri を他の切片と入れ換えることはできるが，この入れ換えによって（9）に知的意味にもとづいた弁別は生じないと仮定しよう．この仮定のもとでの ri を，表意単位の実現形と言うことはできない．どのような実現形を用いても（たとえば ri であろうが *aimé* であろうが *trouvé* であろうが）知的意味にもとづいた弁別が発話に生じない文脈がもしあるとすれば，それは表意単位が現れえない文脈であると考えざるをえない．

したがって，発話の切片が条件（A）あるいは条件（B）をみたさないとき，その切片を表意単位の実現形とみなすことはできないと言ってよい．条件（A）をみたさない切片は，記号素の実現形の一部分にすぎない．条件（B）をみたさない切片がもしあるとすれば，それは表意単位が現れえない文脈にしか現れえないような切片のはずである．

2.3 半過去記号素，単純過去記号素，複合過去記号素の存在

半過去の動詞形には，半過去記号素の実現形が含まれる．たとえば *était* という動詞形には，*est* には含まれない表意単位の実現形が含まれる．この切片は，弁別単位である音素の実現形でもなければ音素の実現形の単なる連続でもな

い. 半過去の動詞形を特徴づけるこの切片は, 表意単位の実現形としての必要条件をみたす (2.1 を参照). すなわち半過去形を特徴づける切片は, (11) の *était* と (12) の *est* にみられるように, ほかの切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる. また, その入れ換えによって知的意味にもとづく弁別が発話に生じる. この切片は, 記号素の実現形と考えられる. 半過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである.

(11) Les Grecs, *c'était* quelque chose. (Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.67)

(12) On a beau dire, les femmes... *c'est* quelque chose ! (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.152)

(13) Elle *hocha* la tête, cherchant une réponse qu'elle n'avait pas. (Françoise Sagan, *Le miroir égaré*, Collection Pocket, 1996, p.18)

(14) Plume Rouge *hoche* la tête, l'air embêté. (Serge Brussolo, *La fenêtre jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.16)

単純過去の動詞形には, 単純過去記号素の実現形が含まれる. (13) の *hocha* には, (14) の *hoche* には含まれない表意単位の実現形が含まれる. この切片は, 弁別単位である音素の実現形でもなければ音素の実現形の単なる連続でもない. 単純過去の動詞形を特徴づけるこの切片は, 表意単位の実現形としての必要条件をみたす (2.1 を参照). つまり単純過去形を特徴づける切片は, (13) の *hocha* と (14) の *hoche* にみられるように, ほかの切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる. また, その入れ換えによって知的意味にもとづく弁別が発話に生じる. この切片は, 記号素の実現形と考えられる. それが単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである.

(15) Il *a fait* la moue, [...] . (Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.25)

(16) Edwin *fait* la moue. (Serge Brussolo, *La fenêtre jaune*, Collection

Le Livre de Poche, 2007, p.144)

複合過去の動詞形には、複合過去記号素の実現形が含まれる。たとえば (15) の *a fait* という動詞形には、(16) の *fait* には含まれない表意単位の実現形が含まれる。この切片は、弁別単位である音素の実現形でもなければ音素の実現形の単なる連続でもない。複合過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたく (2.1 を参照)。すなわち複合過去形を特徴づける切片は、(15) の *a fait* と (16) の *fait* にみられるように、ほかの切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって知的意味にもとづく弁別が発話に生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

2.4 有標の項と無標の項の弁別

複数の言語単位が、機能的な共通部分を共有することがある。たとえば、*chienne* と *chiot* という表意単位には「犬」という表意機能的な共通部分がある。また *homme* と *femme* には、表意機能の側面において「人間」という共通部分がある。

機能的共通部分を共有する複数の言語単位のなかで、機能的な非共通部分を備えたものを「有標の項」と呼ぶ。「有標」という用語は、標識の存在を意味する。「標識」という概念は、機能における「共通部分以外の部分」つまり機能的な非共通部分に対応する。たとえば *chienne* と *chiot* は、どちらも有標の項だと考えられる。つまり *chienne* は、*chienne* と *chiot* の機能的共通部分である「犬」に加えて「牝」という機能的非共通部分も備えている。一方 *chiot* は、*chienne* と *chiot* の機能的共通部分である「犬」だけでなく「仔」という機能的非共通部分も備えている。有標の項は、いわば「機能的共通部分 + 機能的非共通部分」ということになる。

機能的共通部分を共有する複数の言語単位のなかで、機能的な非共通部分を

備えていないものを「無標の項」と呼ぶ。「無標」という用語は、標識の不在を意味する。つまり無標の項は、機能的共通部分しかもたない言語単位である。ようするに無標の項は「機能的な共通部分」そのものにほかならない。たとえば chien (犬) は、chienne (牝犬) や chiot (仔犬) との関係において、無標の項だと言ってよい。同様に homme は、femme との関係において、無標の項である。有標の項である femme は「人間」概念だけでなく、機能的な非共通部分としての「女性」概念を備えている。一方 homme は、機能的な共通部分である「人間」概念しか備えていない。

機能的共通部分だけを表現することができるのは、無標の項だけである。有標の項は、機能的な共通部分だけを表現することができない。有標の項は、機能的共通部分に加えて、機能的な非共通部分も備えているからである。たとえば chien, chienne, chiot のなかで「犬」という機能的共通部分だけを表現することができるのは、無標の項である chien だけである。有標の項である chienne や chiot では、単なる「犬」概念だけを表現することはできない。

2.5 二種類の過去時制記号素：半過去記号素と単純過去記号素

過去時間に位置づけられた事態について、その事態の過去性を表示するための記号素を過去時制記号素と呼ぶ。たとえば (17) の la tempête se déchaînait ... と (18) の la tempête se déchaîna ... には、過去時制記号素の実現形が含まれると言ってよい。これらの事態が過去時間に位置づけられていることを、それぞれの動詞形が標示しているからである (2.6 と 2.7 を参照)。実際 (17) の ... se déchaînait ... には、半過去記号素の実現形が含まれる (2.3 を参照)。また (18) の ... se déchaîna ... には、単純過去記号素の実現形が含まれる (2.3 を参照)。

(17) La tempête se *déchaînait* maintenant sur la Ville ; [...]. (Jacques Roubaud, *La belle Hortense*, Collection Points, 1990, p.174)

- (18) La tempête se *déchaîna* toute la nuit. (Jacques Roubaud, *La belle Hortense*, Collection Points, 1990, p.175)

つまり半過去記号素と単純過去記号素は、いずれも過去時制記号素である。半過去記号素と単純過去記号素には、それらが過去時制記号素であるという機能的な共通部分がある。半過去記号素は、無標の過去時制記号素である（2.4と2.7を参照）。一方、単純過去記号素は有標の過去時制記号素である（2.4と2.6を参照）。

- (19) New York *était* l'endroit le plus intense de la planète. (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.182)

- (20) Dom Pérignon *était* la marque de champagne la plus célèbre du monde. (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.105)

過去時制記号素は、現在時間に位置づけられた事態に直接的に言及する表意機能を備えていない。過去時制記号素は、過去時間に位置づけられた事態について、その事態の過去性を表示するための表意単位だからである。たとえば(19)のNew York *était* ... や(20)のDom Pérignon *était* ... に半過去記号素の実現形が含まれていることと、これらの事態の現在時間におけるあり方の間に、関連性はとくにない。これらの発話における半過去記号素の使用は、事態を過去時間に位置づけているだけである。(19)のNew York *était* ... や(20)のDom Pérignon *était* ... という過去の事態は、現在時間においても成立しているのかもしれないし、成立していないのかもしれない。現在時間における事態の成立や不成立を、過去時制記号素である半過去記号素は表現しない。

2.6 単純過去記号素の基本的な表意機能：完了アスペクトを含意した有標の過去時制記号素

単純過去記号素は、過去時制記号素である。単純過去記号素の実現形を用いて表現した事態は、過去時間に位置づけられることになる。たとえば(21)の

Adamsberg *fronça* ... は、現実世界の事態であるか物語世界の事態であるかとはともかくとしても、少なくとも現在時間や未来時間に属する事態ではありえない。単純過去記号素の使用はその意味で、事態の過去時間への位置づけと常に結びついている。単純過去記号素は、過去時制記号素であると考えてよい (2.5 を参照)。

(21) Adamsberg *fronça* les sourcils. (Fred Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.52)

(22) Azer *fronce* les sourcils. (Jean-Christophe Grangé, *L'Empire des Loups*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.533)

単純過去記号素は、過去時制記号素であるだけでなく、事態の完了も明示する表意単位である。実際 (21) の Adamsberg *fronça* ... を、未完了の事態として解釈することはできない。(22) の Azer *fronce* ... には、未完了の事態としての解釈がありうる (これから眉をひそめる、眉をひそめている最中だ、などの解釈)。しかし (21) の Adamsberg *fronça* ... には、その可能性がない。動詞形に、単純過去記号素の実現形が含まれているからである。単純過去記号素の使用は、事態の完了と常に結びついている。

したがって単純過去記号素は、有標の過去時制記号素であると考えられる。単純過去記号素は、事態が完了していることを明示する過去時制記号素だからである。単純過去記号素の実現形は、動詞記号素の実現形を含む発話が表現する事態を過去時間に位置づけるだけでなく、その事態の完了も標示する。したがって単純過去記号素の実現形によって標示される過去時間への位置づけは、事態が完了しているのか未完了であるのかの弁別を含意していると言ってよい。単純過去記号素は、完了アスペクトを含意した有標の過去時制記号素なのである (2.4 と 2.5 を参照)。

2.7 半過去記号素の基本的な表意機能：無標の過去時制記号素

2.7.1 無標の過去時制記号素として機能する半過去記号素

半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態を、過去時間に位置づけることにほかならない。たとえば現在の動詞形を用いた(23)の *Hurlejaume ne vient ici ...* は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。一方、半過去記号素の実現形を用いた(24)の *il venait ici ...* は「過去時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。これらの解釈の間には、事態の時間的な位置づけが現在時間にあるのか過去時間にあるのかという違いしかない。実際(24)から半過去記号素の実現形を除去した *il vient ici une fois par semaine depuis trois ans* は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈してよい。つまり(24)における半過去記号素の使用理由は、*il vient ici une fois par semaine depuis trois ans* という事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもない(25を参照)。

(23) *Hurlejaume ne vient ici qu'une fois la semaine.* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.51)

(24) *Il venait ici une fois par semaine depuis trois ans.* (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.142)

(25) *Il était dix heures.* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.191)

(26) *Il est dix heures quand Robert s'engage dans la rue.* (Marc Levy, *Les enfants de la liberté*, Collection Pocket, 2007, p.131)

したがって半過去記号素は、無標の過去時制記号素だと考えてよい。つまり半過去記号素は、過去時制記号(半過去記号素と単純過去記号素)の表意機能的な共通部分のみを備えた表意単位である。たとえば(25)の *il était dix heures* と、いわゆる物語体現在として提示された(26)の *il est dix heures ...* の

間にある表意機能的な相違は、事態の過去時間への位置づけを明示しているかそうでないかの違いに帰着する。言い換えれば *il était dix heures* における半過去記号素の存在意義は、*il est dix heures* という事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもない。このように「事態の過去時間への位置づけ」だけを表現することができる過去時制記号素は、無標の過去時制記号素だけである (2.4 を参照)。「事態の過去時間への位置づけ」は、過去時制記号素がもつ機能的な共通部分だからである (2.5 を参照)。よって半過去記号素は、無標の過去時制記号素にほかならない。

2.7.2 半過去記号素が示す無標性：完了した事態と未完了の事態の弁別の不在

無標の過去時制記号素である半過去記号素は、事態が完了しているのか未完了であるのかというアスペクト的な弁別を備えていない。半過去記号素は、完了アスペクトを含意した過去時制記号素でもなければ、未完了アスペクトを含意した過去時制記号素でもないからである。半過去記号素は、無標の過去時制記号素である (2.7.1 を参照)。実際 (24) の *il venait ici ...* に含まれる半過去記号素の実現形は、*il vient ici une fois par semaine depuis trois ans* にたいして、あらたに完了アスペクトを加えることもなければ未完了アスペクトを加えることもない。同様に (25) の *il était dix heures* に含まれる半過去記号素の実現形は、*il est dix heures* にたいして、あらたに完了アスペクトを加えることもなければ未完了アスペクトを加えることもない。これらの発話に含まれる半過去記号素の実現形は、事態を過去時間に位置づけているだけなのである。

(27) [...] : quand Sartre *terminait* une pièce, elle était immédiatement montée, parfois par les plus grands. (*Elle*, 30 mai 2005, p.74)

(28) L'ambassadeur *terminait* une conversation téléphonique lorsque Voronkof entra dans son bureau. (Thierry Breton et Denis Beneich, *Softwar*, Collection Le Livre de Poche, 1984, p.193)

半過去記号素の実現形を用いて表現された事態が、完了した事態であるのか未完了の事態であるのかは、半過去形記号素にとっては非本質的な、単なる解釈に過ぎない。たとえば (27) の ... Sartre terminait ... は、完了した事態として解釈される。一方 (28) の l'ambassadeur terminait ... は、未完了の事態として解釈される。完了した事態としての解釈と未完了の事態としての解釈の両方に対応することができるのは、半過去記号素が無標の過去時制記号素であるからにほかならない。

2.8 複合過去記号素の基本的な表意機能：完了アスペクト記号素

複合過去記号素は、完了アスペクト記号素である。たとえば (29) の il est parti ... における複合過去記号素の実現形は、この事態が完了していることを明示する。実際 est parti という動詞形によって表現された事態を、未完了の事態として解釈することはできない。複合過去記号素は、事態の完了を明示することに特化した完了アスペクト記号素であると言ってよい。

(29) Il *est parti* pour Philadelphie, il y a un mois. (Maxime Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.158)

(30) L'Afrique *a changé* depuis les safaris d'Hemingway. (Frédéric Beigbeder, *99 francs (14,99 euros)*, Collection Folio, 2000, p.140)

(31) T'as bientôt *fini* ? (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.46)

(32) Comme on ne récolte que ce que l'on *a semé*, il avait consacré son existence à purifier son karma. (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.109)

複合過去記号素は、時制記号素ではない。アスペクト記号素である。実際、複合過去記号素の実現形は、それが表現する事態の時間的な位置づけを特定する表意機能を備えていない。たとえば (29) において il est parti ... で表され

た事態の成立は, *il y a un mois* が示すように, 過去時間に位置づけられている. (30) において *l’Afrique a changé ...* で表現された事態の成立は, *depuis les safaris d’Hemingway* の存在が示唆するように, 現在時間に位置づけられている. (31) において *t’as ... fini* によって表された事態の成立は, *bientôt* の存在が示すように, 未来時間に位置づけられている. (32) において *... on a semé* によって表現された事態の成立は, 過去時間, 現在時間, 未来時間のいずれにも特定されない. このように, 複合過去記号素の使用は時間的な位置づけによる制約を受けない. 複合過去記号素が時制記号素ではなく, アスペクト記号素だからである.

3. 過去時制記号素と「習慣」の表現

3.1 有標の過去時制記号素と「習慣」の表現 : 単純過去記号素

過去時間における習慣的な事態の表現において, 単純過去記号素の実現形が現れることがある. 単純過去記号素は, 単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする時制記号素である (2.3 と 2.5 を参照). たとえば, 過去時間における習慣的な事態を表現した (33) の *Gréco alla souvent ...* や (34) の *Charlotte Corday y vint souvent ...* には, 単純過去記号素の実現形が含まれる. 同様に単純過去記号素の実現形を含んだ (35) の *..., cette pièce d’eau fut souvent ...* や (36) の *Louis XIV, plus que ses deux successeurs, eut souvent ...* もまた, 過去時間における習慣的な事態を表現した発話と考えてよい.

(33) *Gréco alla souvent rendre visite à Pierre Mac Orlan dans sa maison de Saint-Cyr-sur-Morin.* (Internet)

(34) *Charlotte Corday y vint souvent visiter des amis.* (Internet)

(35) *Sous l’Ancien Régime, cette pièce d’eau fut souvent le théâtre de*

fêtes nautiques. (Internet)

- (36) Louis XIV, plus que ses deux successeurs, *eut* souvent recours à leurs services. (Internet)

過去時間における習慣的な事態の表現に単純過去記号素の実現形が含まれるとき、その習慣的事態は現在時間においては維持されていないと解釈される。たとえば (33) の *Gréco alla ...* や (34) の *Charlotte Corday y vint ...* で表現された事態は、現在時間においては成立しない³。これらの事態は、既に完了したものとして解釈される。単純過去記号素には、完了アスペクトが含意されているからである (2.6 を参照)。ただし過去時制記号素は、現在時間に位置づけられた事態に直接的に言及する表意機能を備えてはいない (2.5 を参照)。

3.2 無標の過去時制記号素と「習慣的な事態」の表現

3.2.1 「習慣的な事態」の表現における半過去記号素

過去時間における習慣的な事態の表現において、半過去記号素の実現形が現れることがある。半過去記号素は、半過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする時制記号素である (2.3 と 2.5 を参照)。たとえば、過去時間における習慣的な事態を表現した (37) の *Mado venait ...* や (38) の *j'allais ...* には、半過去記号素の実現形が含まれる。同様に半過去記号素の実現形を含んだ (39) の *le dimanche, il restait ...* もまた、過去時間における習慣的な事態を表現した発話と考えてよい。

- (37) Mado *venait* deux ou trois jours par semaine. (Georges Simenon, *L'évadé*, Collection Folio, 1936, p.55)

- (38) *J'allais* à la messe quand j'étais petite, [...]. (Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.88)

³ 物語世界の場合には、現在時間という時間領域そのものが存在しないと思われる。

(39) Le dimanche, il *restait* toute la journée. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.36)

(40) [...], elle *vient* une fois par semaine, le mardi matin. (Fred Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.127)

(41) Elle *va* à la messe, le dimanche... C'est plutôt une habitude mondaine. (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Sueurs froides*, Collection Folio, 1958, p.17)

(42) Le mercredi, je *reste* avec les enfants. (*Elle*, 25 avril 2005, p.198)

過去時間における習慣的な事態の表現に現れる半過去記号素は、無標の過去時制記号素にはかならない。たとえば現在形の動詞を用いた (40) の elle vient ... は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。一方、半過去記号素の実現形を用いた (37) の Mado venait ... は「過去時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。「現在時間における習慣的な事態」という解釈と「過去時間における習慣的な事態」という解釈の間には、事態の時間的な位置づけが現在時間にあるのか過去時間にあるのかという相違しかない。実際 (37) から半過去記号素の実現形を除去した Mado vient deux ou trois jours par semaine は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈してよい。つまり (37) における半過去記号素の存在理由は、Mado vient deux ou trois jours par semaine という事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもない (2.7.1 を参照)。同様に (41) の elle va ... にみられる「現在時間における習慣的な事態」という解釈と (38) の j'allais ... にみられる「過去時間における習慣的な事態」という解釈の間にある相違は、事態を現在時間に位置づけているのか過去時間に位置づけているのかの違いでしかない。(39) の le dimanche, il restait ... と (42) の le mercredi, je reste ... についても同様である。実際 (42) の le mercredi, je reste ... に半過去記号素の実現形を加えれば, le mercredi,

je restais avec les enfants という「過去時間における習慣的な事態」を表現した発話となる。つまり (39) の *le dimanche, il restait ...* における半過去記号素の存在意義は、*le dimanche, il reste toute la journée* という事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもありえない。半過去記号素が、無標の過去時制記号素だからである (2.7.1 を参照)。

3.2.2 半過去記号素と現在時間における「習慣」の有無

過去時間における習慣的な事態の表現に半過去記号素の実現形が含まれるとき、その習慣的事態が現在時間においても維持されていると解釈できることがある。たとえば (43) の *tu buvais du vin* や (44) の *... on parlait le français*, (45) の *... je croyais alors* は、それぞれ「過去時間における習慣的な事態」であると言ってよい。これらの事態は、過去時間においてだけでなく、現在時間においても引き続き成立していると考えることができる。無標の過去時制記号素である半過去記号素は、未完了の事態に対応することができるからである (2.7.2 を参照)。

(43) Je ne savais pas que tu *buvais* du vin, [...]. (Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.99)

(44) La traversée de Bruxelles fut une aventure. Là-bas aussi on *parlait* le français, [...]. (Marc Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, p.118)

(45) C'est ce que je *croyais* alors, et je le crois toujours. (Ernest Hemingway, *Paris est une fête*, Collection Folio, 1964, p.36)

(46) Avant, je *donnais* quatorze heures de cours par semaine. Maintenant, je donne cours quand on ne bombarde pas l'Université. (Amélie Nothomb, *Les Combustibles*, Collection Le Livre de Poche, 2002, pp.10-11)

(47) Il y a cinq ans, c'est moi qui te *lisais* tes histoires avant d'aller dormir, tu te souviens ? (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.89)

(48) En fait, je suis contente d'être remonté ici. J'y *venais* souvent avec mon père pendant mon enfance. (Eric-Emmanuel Schmitt, *La rêveuse d'Ostende*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.100)

過去時間における習慣的な事態の表現に半過去記号素の実現形が含まれるとき、その習慣的事態が現在時間においては維持されていないと解釈できることがある。たとえば(46)の *avant, je donnais ...* や(47)の *... moi qui te lisais ...*, (48)の *j'y venais ...* は、それぞれ「過去時間における習慣的な事態」であると言ってよい。これらの事態は、現在時間においては成立していないと考えることができる。無標の過去時制記号素である半過去記号素は、完了した事態に対応することができるからである(2.7.2を参照)。

(49) Elle *allait* au cinéma presque tous les jours, [...]. (Sébastien Japrisot, *Compartiment tueurs*, Collection Folio, 1962, p.122)

(50) Le dimanche, elle *faisait* la cuisine. (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.15)

(51) Je *travillais* le samedi et *piaffais* tout le dimanche. (Anna Gavalda, *Je l'aimais*, Collection J'ai lu, 2002, p.110)

過去時間における習慣的な事態の表現に半過去記号素の実現形が含まれるとき、その習慣的事態が現在時間においても維持されているのか維持されていないのかが、とくに問題とはならない事例がある。たとえば(49)の *elle allait ...* や(50)の *le dimanche, elle faisait ...*, (51)の *je travaillais et piaffais ...* はそれぞれ「過去時間における習慣的な事態」であると言ってよい。これらの事態が現在時間においても引き続き成立しているのか成立していないのかは、とくに問題とはならない。無標の過去時制記号素である半過去記号素は、完了し

た事態と未完了の事態の弁別を積極的には表現しないからである（2.7.2を参照）。また過去時制記号素である半過去記号素は、そもそも、現在時間に位置づけられた事態に直接的に言及する表意機能を備えていない（2.5を参照）。

3.3 完了アスペクト記号素と「習慣」の表現：複合過去記号素

習慣的な事態の表現において、複合過去記号素の実現形が現れることがある。複合過去記号素は、複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする完了アスペクト記号素である（2.3と2.8を参照）。たとえば、習慣的な事態を表現した（52）の *j'ai longtemps fumé* や（53）の *je suis venue ...* には、複合過去記号素の実現形が含まれる。同様に複合過去記号素の実現形を含んだ（54）の *tu as toujours dormi ici* もまた、習慣的な事態を表現した発話と考えてよい。

(52) *J'ai longtemps fumé.* (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*,
Collection J'ai lu, 2006, p.176)

(53) *Je suis venue dans cette chambre souvent ?* (Sébastien Japrisot,
Piège pour Cendrillon, Collection Folio, 1965, p.80)

(54) *Tu as toujours dormi ici ?* (Amélie Nothomb, *Antéchrista*,
Collection Le Livre de Poche, 2003, p.15)

習慣的な事態の表現に複合過去記号素の実現形が含まれるとき、その習慣的な事態は現在時間においては維持されていないと解釈される。たとえば（52）の *j'ai longtemps fumé* や（53）の *je suis venue ...* で表現された事態は、現在時間においては成立しないことになる。これらの事態は、原則として、既に完了したものとして解釈される。複合過去記号素は、完了アスペクト記号素だからである（2.8を参照）。

4. まとめ

半過去記号素は、無標の過去時制記号素である。つまり半過去記号素は、過去時制記号素（半過去記号素および単純過去記号素）の機能的な共通部分のみを備えた表意単位である。半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態を、過去時間に位置づけることにほかならない。たとえば現在形の動詞を用いた (55) の *je ne fume pas* は「現在時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。一方、半過去記号素の実現形を用いた (56) の *Marie ne fumait pas* は「過去時間における習慣的な事態」を表現した発話として解釈することができる。「現在時間における習慣的な事態」という解釈と「過去時間における習慣的な事態」という解釈の間には、事態の時間的な位置づけが現在時間にあるのか過去時間にあるのかという相違しかない。

(55) *Je ne fume pas.* (Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.86)

(56) *Marie ne fumait pas.* (Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.123)

(57) *Elle rit comme elle riait avant, lorsque nous nous aimions.* (Guillaume Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.253)

(58) *Avant il me souriait !* (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.84)

(59) *Le mardi, les cours commençaient à huit heures du matin.* (Amélie Nothomb, *Antéchrista*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.12)

過去時間に成立していた習慣的な事態が現在時間においても維持されているのか維持されていないのかという弁別を、半過去記号素は積極的には表現しない。半過去記号素は、無標の過去時制記号素だからである。たとえば (57) の...

comme elle riait ... や (58) の ... il me souriait, (59) の le mardi, les cours commençaient ... は、それぞれ「過去時間における習慣的な事態」であると言ってよい。(57) の ... comme elle riait ... は、過去時間においてだけでなく、現在時間においても引き続き成立している事態として解釈することができる。(58) の ... il me souriait は、現在時間においては成立していない事態として解釈できる。(59) の le mardi, les cours commençaient ... については、それが現在時間においても成立している事態であるのか成立していない事態であるのかという弁別は、とくに問題とはならない。無標の過去時制記号素である半過去記号素は、完了した事態と未完了の事態の弁別を積極的には表現しないからである。また過去時制記号素である半過去記号素は、そもそも、現在時間に位置づけられた事態に直接的に言及するような表意機能を備えていない。

(60) *Veuve et sans enfants, elle fit souvent de longs séjours à Freÿr.*
(Internet)

(61) *Longtemps je me suis couché débonnaire.* (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.31)

習慣的な事態の表現に単純過去記号素の実現形あるいは複合過去記号素の実現形が含まれるとき、その習慣的事態は通常、現在時間においては維持されていない事態として解釈される。たとえば (60) の ..., elle fit souvent ... には、単純過去記号素の実現形が含まれる。一方 (61) の *longtemps je me suis couché ...* には、複合過去記号素の実現形が含まれる。これらの事態は、現在時間においては成立していない事態として解釈される。単純過去記号素や複合過去記号素は、完了アスペクトを表現するからである。

参考文献

川島浩一郎 (2006) 「フランス語の複合過去と半過去に関する一考察 — 時制とアスペクトの間接的対立 —」『福岡大学研究部論集』A6-3, 37-61.

- 川島浩一郎 (2012a) 「半過去と未完了解釈 — 完了か未完了かの弁別を含意しない過去時制 —」『福岡大学人文論叢』43-4, 817-833.
- 川島浩一郎 (2012b) 「過去時制と非現実解釈」『ふらんぼー』37, 東京外国語大学フランス語研究室, 17-35.
- 川島浩一郎 (2012c) 「時間的な対比を表す半過去について」『福岡大学研究部論集』A12-2, 9-13.
- 川島浩一郎 (2013a) 「非動詞化記号素における対立」『ふらんぼー』38, 東京外国語大学フランス語研究室, 13-30.
- 川島浩一郎 (2013b) 「半過去と非現実の帰結 — 間一髪の半過去をめぐって —」『福岡大学研究部論集』A13-1, 25-31.
- 川島浩一郎 (2014a) 「単純未来, 近接未来, 近接過去との共起における半過去と単純過去の対立の中和」『福岡大学人文論叢』45-4, 521-541.
- 川島浩一郎 (2014b) 「複合過去と単純過去の対立の中和」『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室, 45-65.
- 川島浩一郎 (2014c) 「教科書における無標の過去時制: 半過去の教え方」『Rencontres』28, 関西フランス語教育研究会, 107-111.
- 川島浩一郎 (2015a) 「接続法半過去形および接続法大過去形における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学人文論叢』46-4, 899-923.
- 川島浩一郎 (2015b) 「複合過去と半過去の区別に関する一考察 — 現在時との関係の有無 —」『福岡大学人文論叢』47-1, 151-163.
- 川島浩一郎 (2015c) 「仮定を提示する Si 節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — 半過去記号素と原過去時制記号素 —」『福岡大学人文論叢』47-2, 497-519.
- 川島浩一郎 (2015d) 「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン — 時制的弁別とアスペクト的弁別 —」『福岡大学人文論叢』47-3, 787-812.
- 川島浩一郎 (2016a) 「Pendant que 節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学研究部論集』A16-1, 33-40.
- 川島浩一郎 (2016b) 「過去時制記号素との共起における複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — ディスクールとイストワールの弁別と大過去形 —」『福岡大学人文論叢』48-1, 133-152.

- 川島浩一郎（2016c）「無標の過去時制記号素：半過去形の教授方針」『Rencontres』30, 関西フランス語教育研究会, 74-78.
- 川島浩一郎（2016d）「単純過去記号素との共起における完了アスペクト記号素の対立の中和 — 「ディスタール」と「イストワール」の弁別の外側にある原完了アスペクト記号素 —」『福岡大学人文論叢』48-2, 493-512.
- 川島浩一郎（2017a）「複合過去および半過去における点的解釈と線的解釈」『福岡大学教職課程教育センター紀要』創刊号, 福岡大学教職課程教育センター, 33-44.
- 川島浩一郎（2017b）「仮定を表す Si 節における過去時制記号素」『福岡大学人文論叢』48-4, 1127-1144.
- 川島浩一郎（2017c）「無標の完了アスペクト形態素 — フランス語における複合過去形態素 —」『福岡大学教職課程教育センター紀要』2, 53-66.
- 川島浩一郎（2017d）「複合過去記号素および受動態記号素との共起における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — 大過去形と前過去形における過去時制 —」『福岡大学研究部論集』A17-1, 67-81.
- 渡瀬嘉朗（1985）「動詞の「時」と「相」」『フランス語学の諸問題』三修社, 38-49.
- 渡瀬嘉朗（1990）「「未完了」特性について」『東京外国語大学論集』41, 23-38.
- 渡瀬嘉朗（1994）「Actuel と Inactuel — 「現在」と「半過去」, 「大過去」 —」『東京外国語大学論集』48, 43-58.
- 渡瀬嘉朗（1995）「時制の理論のために — 文意の分析と時制の対立 —」『東京外国語大学論集』50, 35-50.
- 渡瀬嘉朗（1998）「二つの過去形 — 意味の枠組みの明確な過去, 枠組みのない過去 —」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』三修社, 8-21.
- 渡瀬嘉朗（2012）『統辞理論の周辺』三修社.
- 渡瀬嘉朗（2013）「時制とマルク」『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題 IV』三修社, 10-16.